

# 松 陰

談話室

第 5 号 1983.4

## 図書館人失格の記

文学部教授 中 山 八 郎

私は昭和23年8月末から6年1ヵ月間、国立国会図書館の一般考査部中国資料室（後に課と改称）に勤務した。その間に感じたことの一端を、与えられた紙数内にまとめてみることにする。

先ず第一に、それまで調査研究機関と大学教師の経験しか持っていなかった私は、図書館に勤めれば思う存分に本を利用して勉強が出来ると思っていた。ところが、いざ勤めてみると当てが外れて、書物という御馳走は眼前に並んでいても、それを自分で食べることは許されず、人に食べさせる役目であり、少くとも建て前の上では、閲覧者とその必要とする図書とを結び付けるのが仕事だということを思い知らされた。

一般考査部というのは一般人向けのリファレンスをする部署で、私はそのうちの中国関係のリファレンサーを仰せ付かったのである。リファレンスを考査と訳したのも変な感じがした。私の小学生の頃は試験のことを考査と称していたからである。米国の図書館ではリファレンス業務が重要視され、利用者も非常に多いとかで、万事米国に見習った日本の国会図書館でも、その「ひそみ」にならったのであろう。しかし私の在勤中は考査の申込みは非常に少かった。

私の記憶では、唯一の例外は来日中の米人学者

ノーマン氏からの間接的質問で、「孫文が宮崎滔天を虬髯客きゅうぜんきゃくに比しているが、虬髯客とは如何なる人物か」という問合せであった。実の所、当時私は虬髯客という者を全然知らなかった。急いで調べ、簡単に答えておいたが、引続いてこの伝説上の人物に興味を懷き、色々調査した、私としては可成り長い論稿を書き上げた。それは後に学校の講義案に利用したこともあり、一部は本学文学部の紀要に掲載したこともある。

さて開館当初の国会図書館は司書の有資格者が払底していた。私も無資格なので図書館学の講習を受けさせられたが、それが了るとすぐに、今度は講師として「中国資料利用法」という講義を受け持たされた。汗顔の至であった。私も一応、司書の辞令を貰ったが、それは当館以外には適用しない資格で、而も確か昭和30年まで有効という期限が付いていた様に思う。私は期限が来ないうちに罷めて教師に転じ、図書館人としては失格者になり下ってしまった。

講習で何を覚えたのか、今は茫として殆ど忘れてしまった。ただ中国資料室だけは、他室と違って閲覧業務の外に資料（図書）を保管していたので、漢籍の分類配置についても多少の私見を持って処理に任じた。



## 私 見

# 若い人の気分で考えた図書館

図書館 渡辺 美好



## 1. 利用者は変わった

大学が、かつての象牙の塔から、駅弁大学、さらに庶民教育の機関へと変貌したことは、万人が認めている。このような変化に対応して、大学教育のあり方が模索されつつあるが、図書館人のものの考え方やサービスは、社会の動きや嗜好と合っているだろうか。

図書館の利用者がどこの大学でも少ないという。学生が図書館へ来ないのは、学生に問題があるからか。理由はもちろん複合しているであろうが、若い人達の生の気持ちをもとに図書館サービスを検証してみたら、いま我々にできることが、案外見えてこないか。以下、逆説的ではあるが、私見をのべてみよう。

最近の若い人が大学へくるのは、ほとんどがサラリーマンになるためである。大学はサラリーマンを養成するのだと割り切ってしまうえば簡単であるものを、何かエリートか学者を養成するかのよう、いつまでも固執していないか。サラリーマンというが、今の会社は会議の場に経済理論の用語がポンポンでてくるし、先端情報を駆使してイキイキと仕事しているその姿は、生半可な研究者よりも、よほど学者的である。

## 2. 好みの本をいれよう

さて、サラリーマンを養成するのだとして、彼らに必要な本は実用書であるから、これを多量に図書館に備えるべきである。ただし、ハウ・ツーものは目先きの用が足せても、事後の応用性、

理論的展開に欠けるから、実務的なものは、最少限に抑えるべきである。すぐ役立つ知識は、たちまち陳腐化してしまう。

大学図書館としては、今日の流動している生きた経済を分析し、把握するのに役立つ文献に絞るべきであろう。これまでは、日々の経済の動きや商業活動を素材にして、就職してから実効のある、具体的な調査法やマネジメントのコツを教える資料が、割合少なかったのではないか。

最近、サラリーマンも広い識見と時代を先取りする目が必要になってきた。企業イメージを高めコミュニティとうまくやっていくためには、社会活動に参加して公益性を訴え、企業競争による厳しい選別のなかで生き残っていくには、これまで他人が考えもしなかったことを商品として開発し、需要を掘り起していかなければならない。これは、経済というよりも、文化のセンスの問題である。

このような状況下に対処するには、経済書を読むだけでは不十分であって、古典をはじめ、多くの教養書を味読することが大切である。巾広い知識が売上げへ結びついていく。今日は、日常から離れた発想の飛躍がなければ、企業人として、もはや失格であるといえよう。

サラリーマンといえども、有限な宇宙船「地球号」の乗組員として、行動していかなければならない。地球的規模での環境問題は、各人が狭い家庭内や企業活動という枠に視点を据えている限り、その深刻な様相は少しも見えてこない。

これらを理解するには、一般書や社会問題を扱った本を読んで、自己の社会常識を積み重ねばなら

ない。特に、いま現実の話題は、研究書という形ではなく、実務担当者とか活動家が意見を主張するというナマの資料でしか存在しないから、これらについても積極的に収集するようにしないと、世の中の事象から置いてきぼりをくう。

### 3. 遊びにきている

いまの学生は、生活をエンジョイしたいという願望が強い。ところで、遊びの精神それ自体は悪いことではない。遊びとは、決まりきった仕事をひたすら“忍”の一字でするとは反対の、自由と創造性に満ちた精神活動である。「之れを知る者は之れを好む者に如かず。之れを好む者は之れを楽しむ者に如かず。」(『論語』雍也篇)という言葉もある。

図書館の利用手続きは、繁雑でことさら利用者負担をかけていないか。生涯を決する大事な本であればともかく、ごく軽い気持ちで借りていこうとするとき、面倒なことをあれこれ言われたのでは、バカバカしくなってしまう。

誰でもそうであるが、公衆の面前で姓名を呼ばれるのはイヤなものである。本を借りる度にいちいちプライバシーを公開しなければならないとしたら、安い本であれば、自分で買ってしまった方がズット気分がよい。

大学図書館にも、一定の割合で娯楽書を入れねばならない。もし、読書を通じて学生たちの人格形成に参加したいというのであれば、キャンパス・ライフに必要なものを制限すべきではないと思う。個人にとって、教養書と娯楽書は判別しがたいものである。

図書館蔵書は、原則的にすべて開架にすべきである。目的があつてする読書は、人生に大きな意味を持ち得ない。書架の間を散策し、何気なく取り出した本に枕頭の書を発見したり、目的もなしに読んだ本から、重大なヒントを掴んだりするのは、よくある話である。

開架方式は、利用者の資料へのアプローチを多

彩にする。カード目録で本を探したい人、実物を見て決めたい人、それらは各人の好みに任せればよい。開架図書が多いと本の密林で利用者が迷うというのは、図書館のレイアウト・配架法・本の装備・サインに問題があるからだ。

### 4. 楽しさの工夫

図書館をもっと楽しい場にできないであろうか。暇があつたから図書館へ来た、何か面白いことはないかと期待してブラリとやって来た、という風にしたいものである。

例えば情報提供であるが、別にカウンターでなければやっていけないという法はない。掲示板とはわからないような、インテリアと融合したボードで文献ニュースを提供する。館内の要所要所に置いてある受話器をとると、図書館の利用案内・文献の使い方・新刊情報が、心地よい音楽とともに流れてくる。これは、その気にさえなれば、すぐにでもできることである。

本や文献に興味をもつ人間にとって楽しさとは、本や資料に関する新しいニュースが得られるかどうかということである。直接役立つか否かにかかわらず、常時この種の情報に接していないと、不安から落ち着きを失くしてしまう書痴特有の症状を呈する。

図書館には、職務柄さまざまな文献情報が流入してくる。その中には、公にするにははばかれるもの、故障の生ずるものもないではないが、研究者に便益を与える情報も随分含まれている。今は個性の時代である。図書館へ行けば、この種のニュースが裏話まで含めてわかるということ、ハッキリカラーとして打ち出すべきではないか。

最近是一種の流行から、大書店ばかりか中小書店でも読書相談の看板を店内の一角にかかげ、お客の質問に答えようとする店が目立つが、なかなか評判がよいようである。狭い見聞であるが、この程度の回答能力は、図書館であればどこでも持っている。にも係わらず、学生をはじめ多くの人

から書店のサービスが重宝がられるというのは、図書館がいかに過少評価されているかを示すと共に、まだまだPRが足りないと思う。

これまでの図書館は、カビくさく、いつ行っても代わり映えがしないという印象が強かった。これからの図書館の建物は、デザインや色彩についても、世間と同じ感性が必要である。図書館はタイム・カプセルではないのだから。

## 5. 触角人間

テレビ育ちの新人類といわれる今の若者は、落ちつきがない、リズム感・スピード感を好む特性があるという。コミックの洪水は、絵とカ形で自己表現をしようとする世代をつくりあげた。

このように、感覚が異常に肥大した学生たちから、フィーリングが合わないと言われないためには、どうしたらよいか。

ブック・カバーのデザインは、本が売れるかどうかを決するほど、出版社にとって重大なものである。買手の注意を引くため苦心を重ねて作ったものを、図書館では安易に捨てていないか。

カバーを取られた本は、におい・音・色・振動を発しない獲物のようなもので、触角人間にとっては、反応をしようがない。まず注意をひく、次に何だろうかと興味をもたせる、という段階をへて、はじめて本の内容が問題となり、読書というものが成立する。

本のイメージは、読後感である感激とともに、装釘の印象がダブって記憶される。利用者の気持を大事にすれば、出版された時の形態をできるだけ崩さない方がよい訳である。ラベルや印は、最小限に抑えているか。

## 6. 即物主義

近年、『ぴあ』、『シティロード』といった情報誌がブームである。都市生活における情報価値が、相対的に高まった結果であるが、若い人たちが情報に注目したことは、図書館にとっても結構

な傾向である。

図書館が情報を扱う専門機関であるのに、それが利用へと結びつかないのは、スレチガイがどこにあるからか。

カウンターにいと、学生たちからそのものズバリ、すなわち情報ないしは資料について、即物的な求められ方をして驚くことがある。右から左へ書き写せば済むようなレポートを先生が出題する筈はないし、また、生きた人間の疑問を過去の文献が的確に答えられよう訳がないとも、後で弁解がましく思う。

図書館員に一言二言たずね、気にいらないとサッサと引き上げてしまうのは、何も学生に限らない。先生方にも、どこまでも食いついて離れず、図書館を骨までシャブリつくして利用するといった態度を、余り見かけない。教室で学生たちが質問しないのと同じように、日本人の特性である礼儀正しさ(?)から、遠慮がつきまとうのかも知れない。

カウンターに立つ係員は、待つことが嫌いで諦めの早い、このような利用者とも応接しなければならない。聖徳太子ではないから、1を聞いて10を知ることは無理としても、二つ三つ位はピンとこないと、呆れられてしまい、利用者をつなぎとめておくことができない。

図書館界でも最近、閲覧や参考系のカウンセリング技術が話題となるが、それと共に、広い知識をもった職員の配置が必要で、この面での養成も重要である。所蔵している資料を、あらゆる点から活用できる知恵と感が係員に備わっていなければ、漠然とした気分でくる利用者を資料へと結びつけ、学習意欲を惹起させることはできないであろう。

参考:『現代若者文化考』菅野拓也著  
築地書館 1981

工学部には図書室があるので、ふだん工学部の学生が図書館へ行くのは多くないようです。本館にも多数の自然科学書が置いてあるのを、工学部の学生はあまり知らないのではないのでしょうか。残念なことです。せっかくある便宜をもっと活用すべきだと思います。

理系では、数学を使って、電気工学の解析を行なうことが多く、この種の課題も多数出題されます。難問で解きにくいときは書庫に類似の問題がありはしないかと探し回り、2〜3冊見つけたことが何度かありました。

すべての参考書を買うことはできませんので、必要があればコピーをし、資料としてファイルしておけばたいへん助かります。

ファイルには種々の方法があり、自分で工夫して保存しておけば、勉強にも興味が湧いてくるは

ずです。私のファイルの方法は、バインダーに項目をつけて分類していますが、先生からもらったプリントも、ただバラバラと机に置いていたのでは、いつの間にか失くなってしまって、せっかく戴いたものが何にもなくなってしまうます。

資料は大切に保存しておきたいものです。

世界中で英語を使用する人が増えた昨今、英文読解力が工学部でも重要視されています。英書をもっと増やし、日本文のものと同数位にしたいと思います。また某図書館のような英会話

カセットの貸出やカセットのコピーも出来るようなコーナーも作ってみたいものです。

最後に、私のような者に職員の方々に親切にして戴き、今回この紙面を与えて下さったことに厚く御礼申し上げます。

## ひびこれこうじつ 図書館日日是好日

工学部電気工学科3年  
串 間 宗 夫

## 著者からひとこと

### 『欧州共同体』

成文堂〔333.83-T097〕

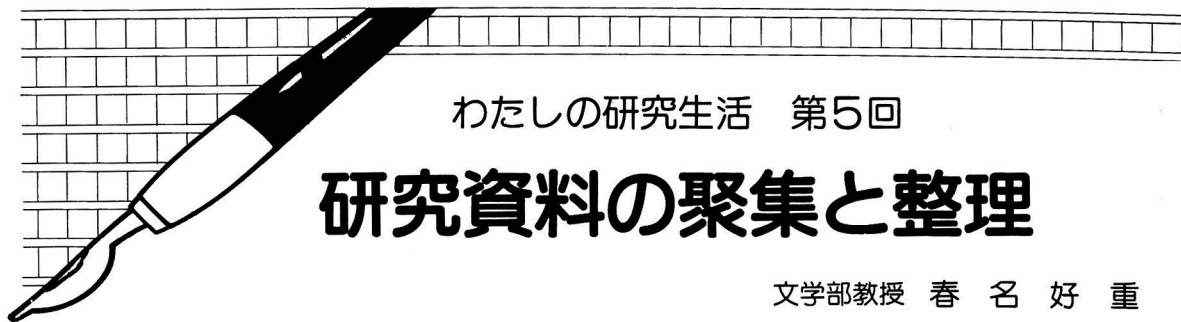
政経学部教授

戸 崎 徹

欧州共同体（EC）は近年、日欧貿易摩擦の問題を中心に、しばしば報道の対象になって世人の関心をひいているが、日本人のECに対する知識は、それほど深まっていない。その主要な理由のひとつは、今や世界史の動向を左右する巨大な存在になっているECに関するわが国の文献の多くが、部分的なアプローチにとどまり、その基本的な性格、特殊な機構と政策、複雑多岐な発展過程等の全般

について正確な知識をうることが容易でないことにあるといえる。

本書は、ECという巨人の姿を一望のもとにとらえるという、きわめて困難な作業に、あえて挑戦したものであり、したがってやや難解な内容のものになったが、ヨーロツパの現状を正確に把握しようとするひとびとにとて、研究の一助となれば幸いである。



わたしの研究生活 第5回

## 研究資料の聚集と整理

文学部教授 春 名 好 重

**私の研究** 私はわが国の書の発達、変遷について研究している。すなわち、日本の書の歴史を研究しているが、私の研究の重点は古代・中世の貴族階級の書にある。

**研究資料(1)** 書の歴史を研究するには、まず各時代の書跡を見なければならない。中世・近世の書跡も高価であるが、古代の書跡は特別高価であるから、買い求めることはできない。また、いくら金があっても、買い求めることは容易でない。それ故、原本通りに複製したのをできる限り集める。それは原寸大である上に、原本と同じ形体であり、同じ色であるのが望ましい。一度は原本を見なければならないが、一度ちよつと見ただけではくわしいことがわからないし、また、忘れる心配がある。古代・中世の名筆劇跡として尊重されている書跡は、明治・大正・昭和の三代にわたって、その全体または一部分が複製されている。ほかに書跡の写真版がたくさん刊行されている。

古代・中世の書跡は、博物館・美術館などで展観されている。非公開の文庫、東京では前田育徳会の尊経閣文庫、京都では近衛家の陽明文庫などには、古代・中世の名筆劇跡がたくさんあるが、学生は見る事ができないので、複製本や原寸大、原色の写真版を利用しなければならない。

わが国の書と中国の書とは密接な関係がある。それ故、わが国の書について研究するには、中国の書についても研究する必要がある。わが国の書と関係の深い六朝時代・随・唐・宋の書は法帖や拓本がたくさんあるので、見る事が容易であり、

法帖・拓本はわが国の古代の名筆劇跡のように高価ではないから求めやすい。

**研究資料(2)** わが国の各時代の書跡を書かれた年代順に並べただけでは、日本の書の歴史の研究はできない。書跡について調べ、筆者について調べるだけでなく、書跡が書かれた時代、とりわけ当時の文学や美術について調べなければならない。そのため、古代・中世のいろいろな文献を読まなければならない。本を読んで、どんなことが書いてあったか、忘れない人はよいが、そんな人はまれである。私は大体のことは覚えているが、こまかいことは忘れる。そのため、カードに書き抜くことにしている。私が用いるカードは、この『松陰』と同じ大きさの原稿用紙と白紙とを用いている。私のカードの書き方について一つの例を挙げることにする。

『扶桑略記』の延長五年二月廿五日の条に「弾正尹親王、為民部卿六十賀、於桃園宮、設法会、奉造薬師仏像、奉写法華経・随願薬師・金剛寿命・般若心経、雑染色紙、金銀絵之、小野道風、同忠則写之」とある。これによって、色紙、色紙の写経、金泥・銀泥で描いた下絵、小野道風・小野忠則が写経をしたことがわかる。そこで、5枚のカードに上記の文を写し、さらに『扶桑略記』の延長五、二、廿五の条にあることを注記し、延長五年は「927」年であることも注記して、色紙・色紙経・下絵・小野道風・小野忠則の研究資料として分類しておく。1枚のカードをいろいろな研究の資料として流用することはできないから、めんど



うでも、上記の場合は5枚のカードを作成する。

私は複写しないで、めんどうでも筆写することになっている。筆写していると、漢文は読めるようになり、句読点・濁点の無いかな文は正しく読めるようになる。複写すると、めんどうでははぶけるが、覚え難い。筆写すると、めんどうであるが、書いているうちに覚える。

**カードの整理** 紀夏井とか、藤原関雄とかという人は、当時は第一の能書として尊重されたが、後世の書に大きな影響が無い。そのため、夏井や関雄のカードは少ししかないが、道風のカードはたくさんある。道風の出生・経歴・官位・書役・書跡・和歌・伝説など、非常に多いから、それぞれ分類する。さらに書役も、額、色紙形、願文などにこまかく分ける。書跡のカードは書跡一点、一点の分類をするだけでなく、たとえば『屏風土代』に関しては、たくさんカードをこまかく分類しなければならない。

**カードの注記** いろいろな本を読んでいて、書に関係のある記載はもちろん、書に関連のある記載はみんな筆写する。さらに必要な注記を加えなければならない。上記の『扶桑略記』についていえば、延長五年は927年であることを注記しておく、たくさんカードを年代順に並べることが容易である。また「弾正尹親王」は克明親王であり、「民部卿」は藤原清貴であることを注記するばかりでなく、道風は寛平六年(894)に生れて、康保三年(966)になくなったので、「894~966」と注記するなど、必要な注記をしておく、カードを利用する時に便利である。利用する時に調べていると利用できなくなることがある。

**料紙の大きさ** 古代・中世の書跡のうち、文書は一枚の紙に書いたのが多いが、卷子本に仕立てたものもある。記録も卷子本が多い。そのほかは卷子本または冊子本あるいはその断簡が大部分である。本の大きさや形で書写年代が大体わかる。また、本の大きさがわかっていると、断簡を見た場合、同じ本であって、同筆であっても、料紙の大き

が違えば、その本の断簡ではなく、ほかの本の断簡と認めなければならない。古代の卷子本・冊子本の断簡は掛物に仕立てて鑑賞の対象とする。掛物に仕立てる際、料紙の天地と左右とを少したちおとすことがある。そのため、もとの本と断簡と大きさに僅かの差があることがある。しかし、その場合は別の本の断簡とはいえない。一面の行数、一行の長さ、文字の大きさは同じが、どうかということ調べる必要がある。それ故、料紙の紙質・色をよく見るとともに料紙の大きさや行数、行の長さなどをはかっておくことがたいせつである。

**源氏物語のカード** 私は『源氏物語』を読みながら、書に直接、間接関係のある文を一冊のノートに筆写した。このノートは『源氏物語』と書との研究には便利であるが、ほかの研究には不便である。たとえば、古代の紙の研究の場合、流用することができない。カードにしておく、たとえば、紫式部の書についての考えとか、陸奥紙とか、薄様とか、色紙とか、色紙のかさねとかに関して、ほかの文献のカードといっしょに利用できる利点がある。

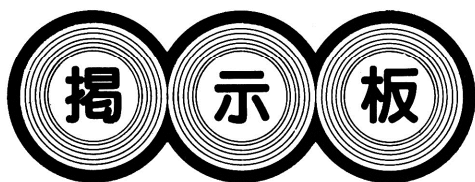
**てまとひまとをかけること** どんな研究でも、ふだん小さな努力を積み重ねること、やつかいなことをめんどうがらないことが肝要である。「犬も歩けば、棒に当たる」といわれている。研究者はいろいろな本を読んで、自分の研究に役立つ記載を発見し、筆写し、分類しなければならない。小さい努力が何十年も続くと、大きな研究がはやく、たやすくできるようになる。

---

(8頁よりつづく)

の目に触れて貰いたいと思うが、次号が出たら有無をいわず書庫へ追いやってしまう、というのは、何か人生のはかなさを感じてしまう。

そこで、特色あるものをひのき舞台へと登場ねがって、一日でも長くみんなの景仰をうけさせたら、編集者の労もいくぶんか報われるように思う。資料はそれ自身に価値があるのではなく、人々に活用されてはじめて価値が生ずるものであるから。



## ●新幹線が図書館をはしる

東北・上越両新幹線が開業して、遠隔地へ行く時間がだいぶ短縮された。盛岡も新潟もまだ行ったことはないが、この分ならいつか行けるかも知れない。

利用者が図書館へ見たいと求めてくる本は、図書館にある本ばかりとは限らない。たとえあったとしても、まだ整理が終わってなかったり、様々の状態が考えられる。ところで、書名や雑誌名を具体的にあげて請求してくるような人は、今すぐそれを見たい筈であるから、応じられない理由が種種図書館側にあっても、それをもって謝絶することはできない。

東海道新幹線には遅れたが、利用者の求めに即応するため、図書館に新幹線が敷設された。利用者の要求する本が蔵書中に確認できないと、いよいよ出番である。すぐさま彼は、収書係・整理係・雑誌係へとすつとんでいく。

図書館の資料は、目録等が作成された後であれば、数十万冊の中から1冊の本を検索するのも訳はないが、整理の途中で探し出すことは、チョット難しい。利用者のあらゆるアプローチに対応できるように各種目録が作られ、書架へ並べられるまでに加工を施さねばならないから、中間に沢山の人の手を経ているため。1箱に30キロもの重さの本を詰め込んである段ボール箱を7～8段も重ねた、その一番下からお目当ての本が出てくることもシバシバである。

図書館にない本はすぐに発注する。この時は、

納入業者に至急扱いで依頼している。キャンパス内の書店にもし探求書があれば、彼が駆けて行って貰ってくることもある。

本を見つけたらどうするか。どこの図書館でも同じように、整理の順番を待っている本が山積みされているから、ほっといたのでは、いつ利用できるか判らない。そこで、この本に特急便のチケットがつけられ、ノン・ストップで終点まで直行することになる。せつかく白熱した利用者の意欲を冷してしまわないために、このような努力もしている。なお、事典等の参考図書は急行便扱いにする約束もできている。

## ●雑誌特集号の活性化をはかる

閲覧室の一角に新刊雑誌コーナーがあるが、この入口に“雑誌特集号紹介”と銘うったボードが置いてある。

「中曽根訪米を待ちうけるアメリカ(中央公論 58年2月号)」、「小倉百人一首一限りなき魅力(国文学解釈と鑑賞 58年1月号)」というカードがここに貼ってある。これは、雑誌の特集号の標題を書いたもので、図書館へ毎日入ってくる雑誌の中から、これらと思うものを逐次カード化して、このように掲出しているのである。

前者は一時世間をにぎわした話題であり、後者は正月を迎える準備として人々の歓心をねらったものである。このように、雑誌の特集号は、社会の様相を実にビビッドな感じで伝えてくれる。内容においては、クロスオーバー的な発想が豊かであり、カレント・トピックスは私たちの意識を世界の動きと同時進行形にさせてくれる。

ごく一般的な雑誌を400種ほど新刊雑誌コーナーに置いてあるが、スペースの関係もあって、当館ではそれらの最新号しか展示していない。これはと思うものは永く展示して、なるべく沢山の人の

(7頁へつづく)